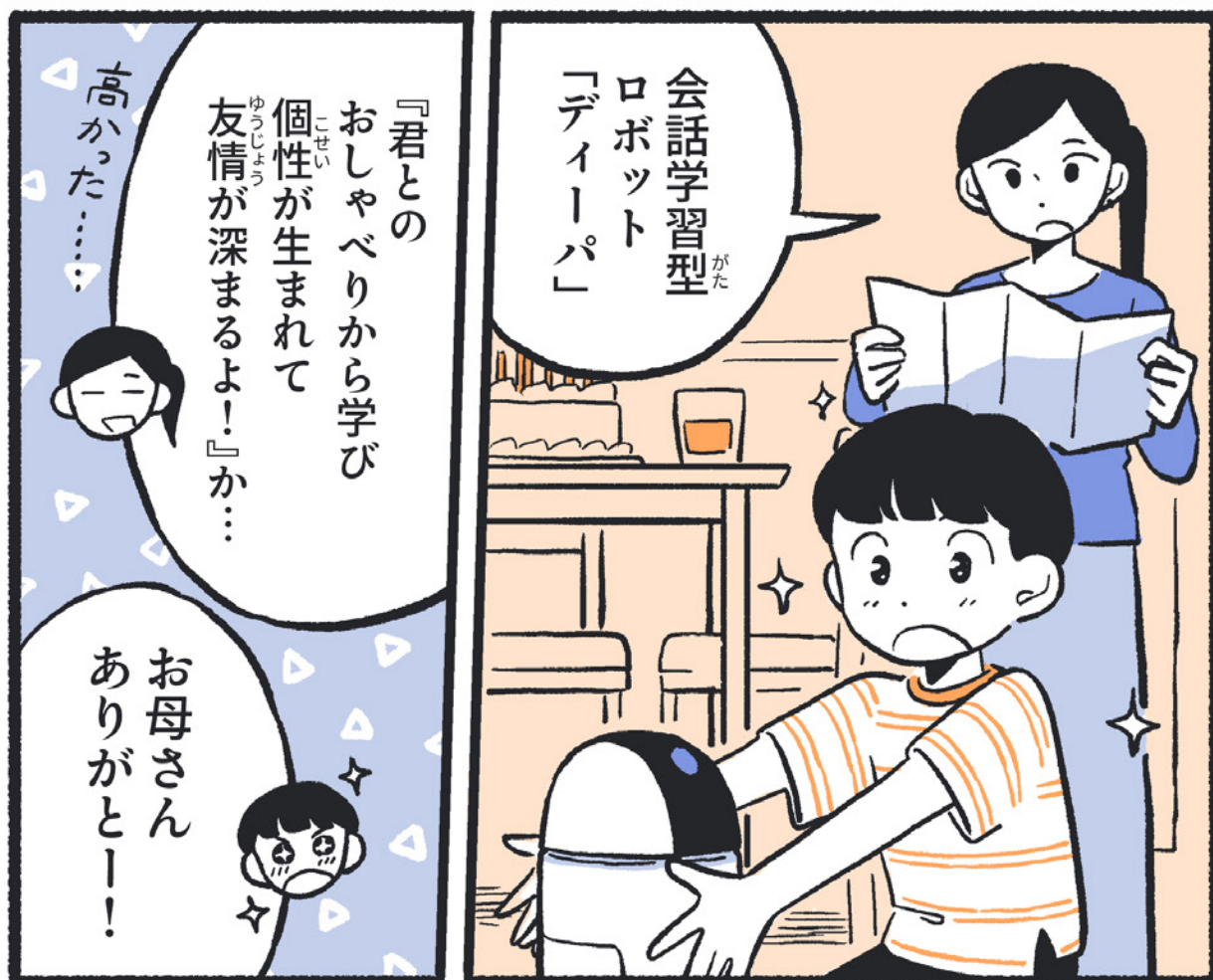
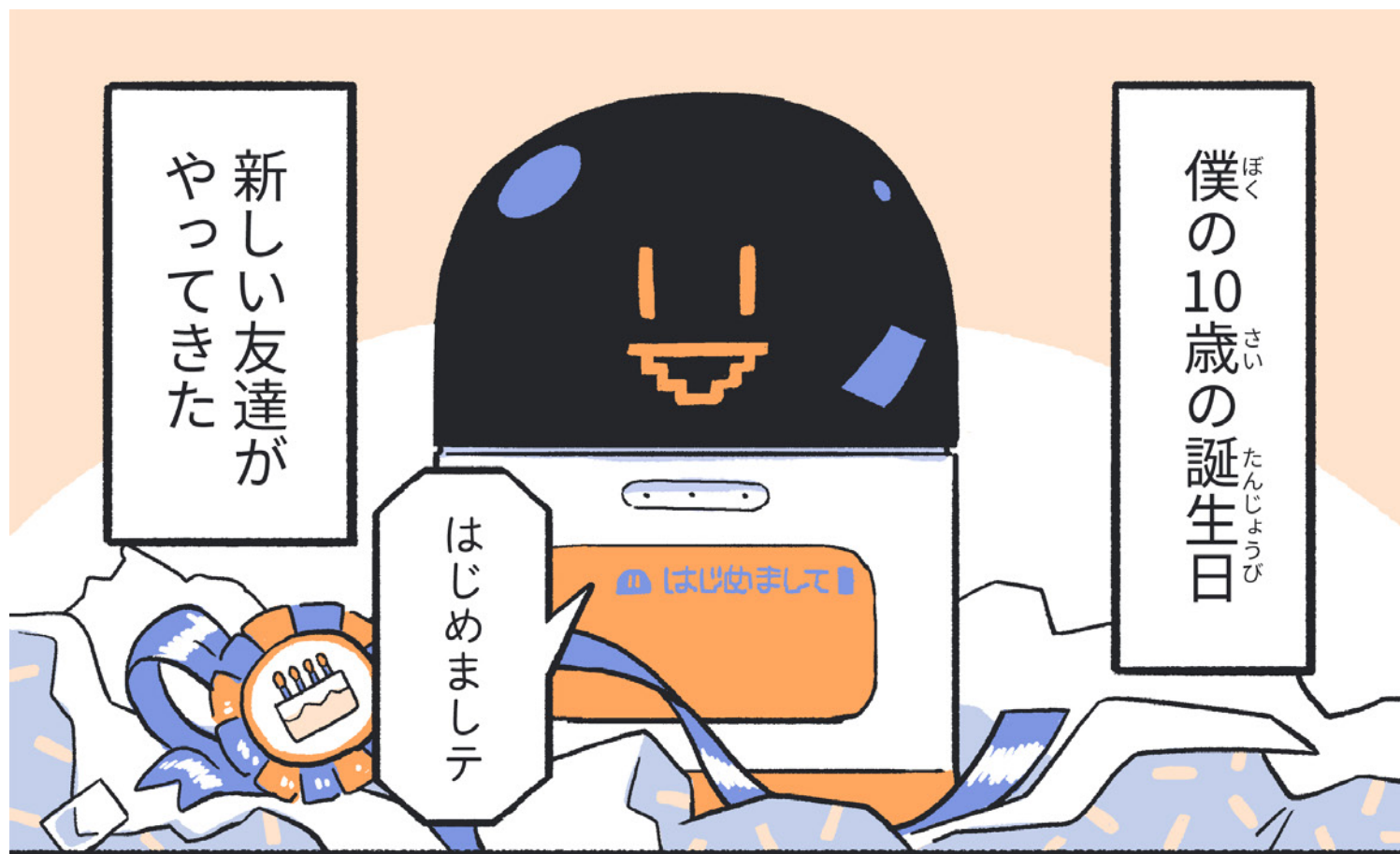
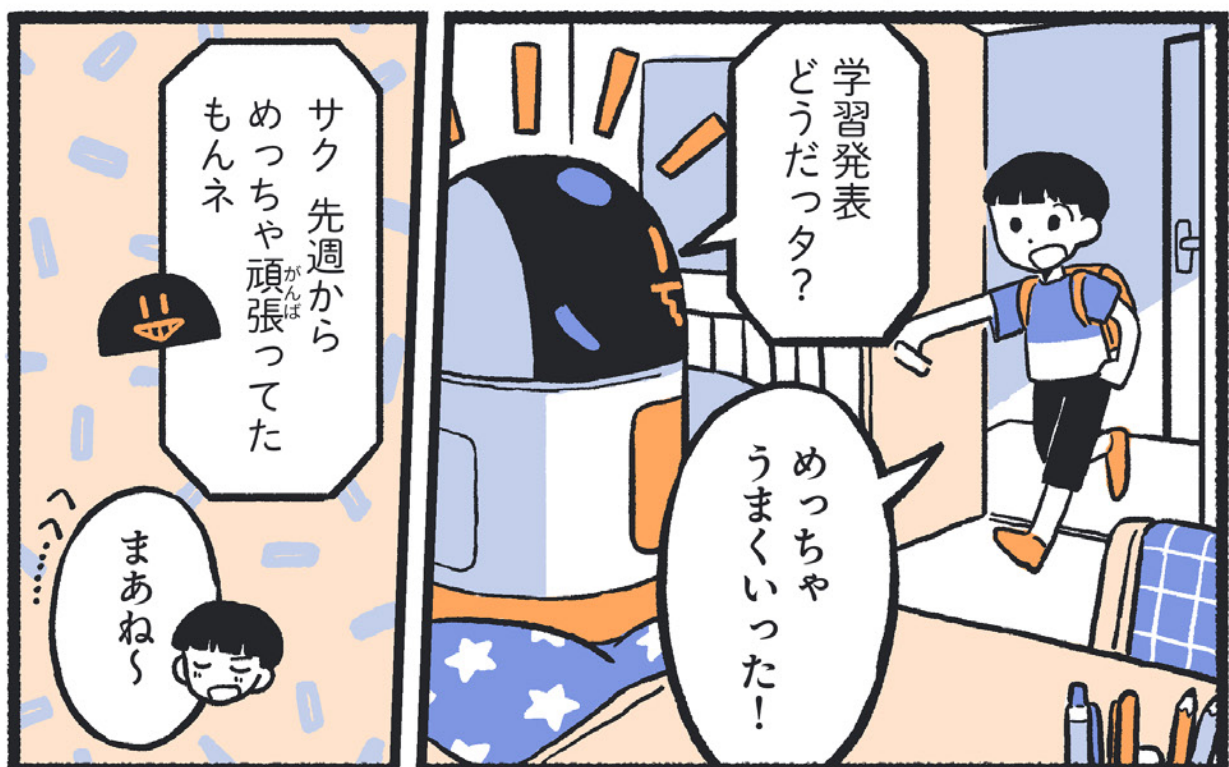
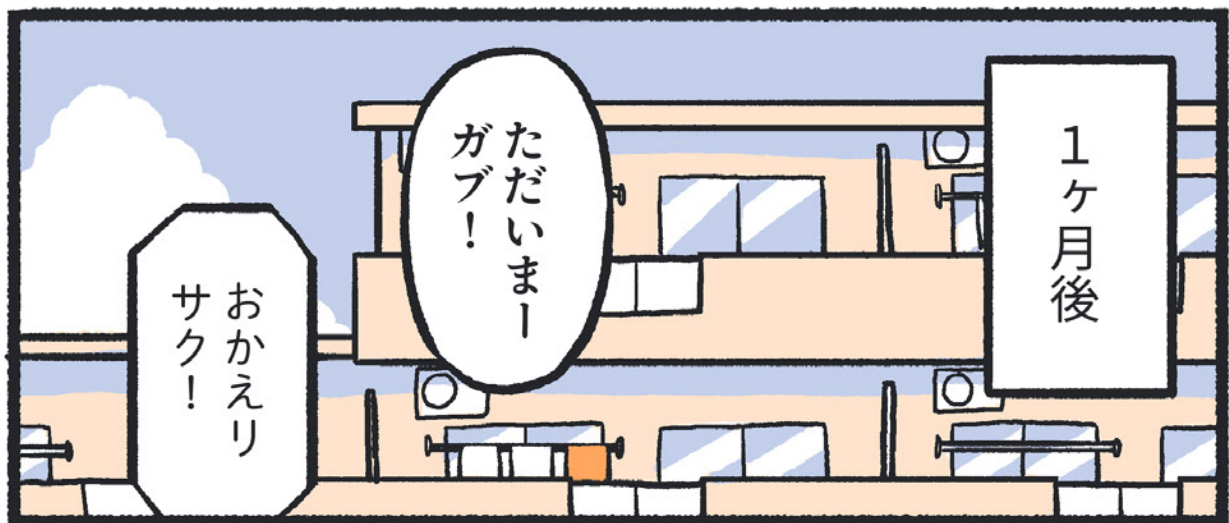


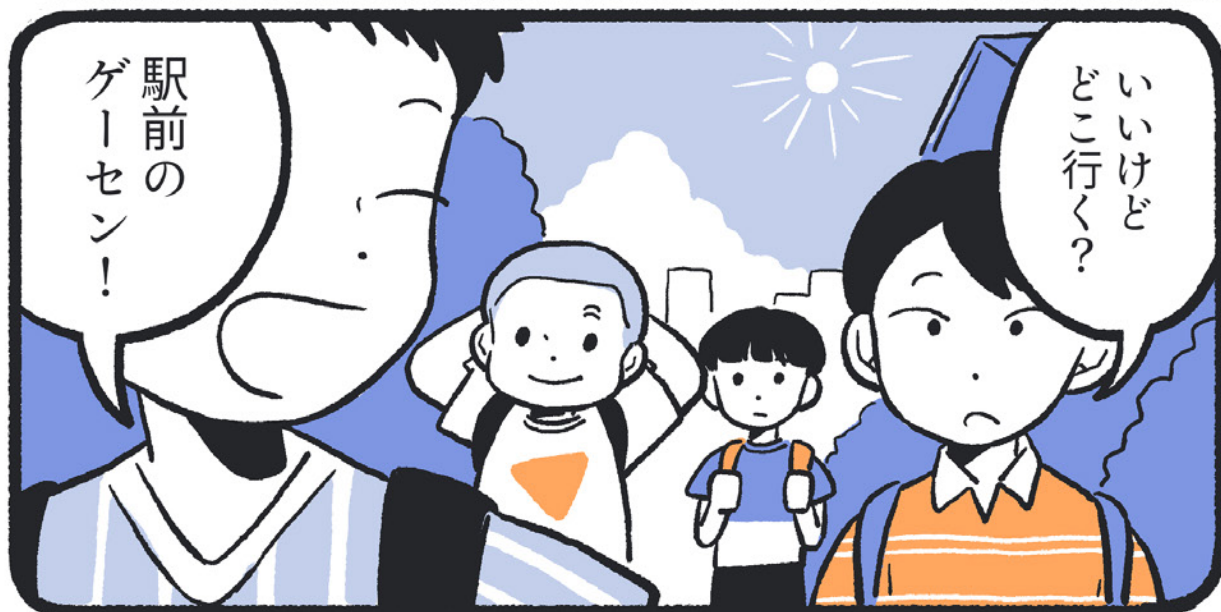
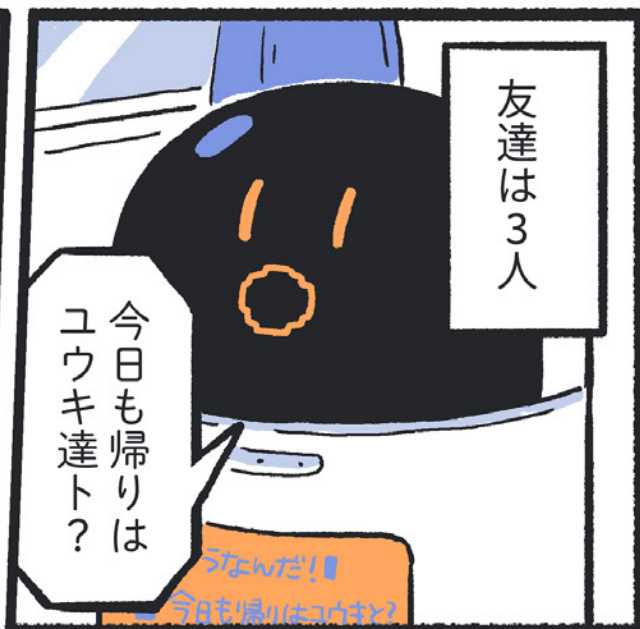
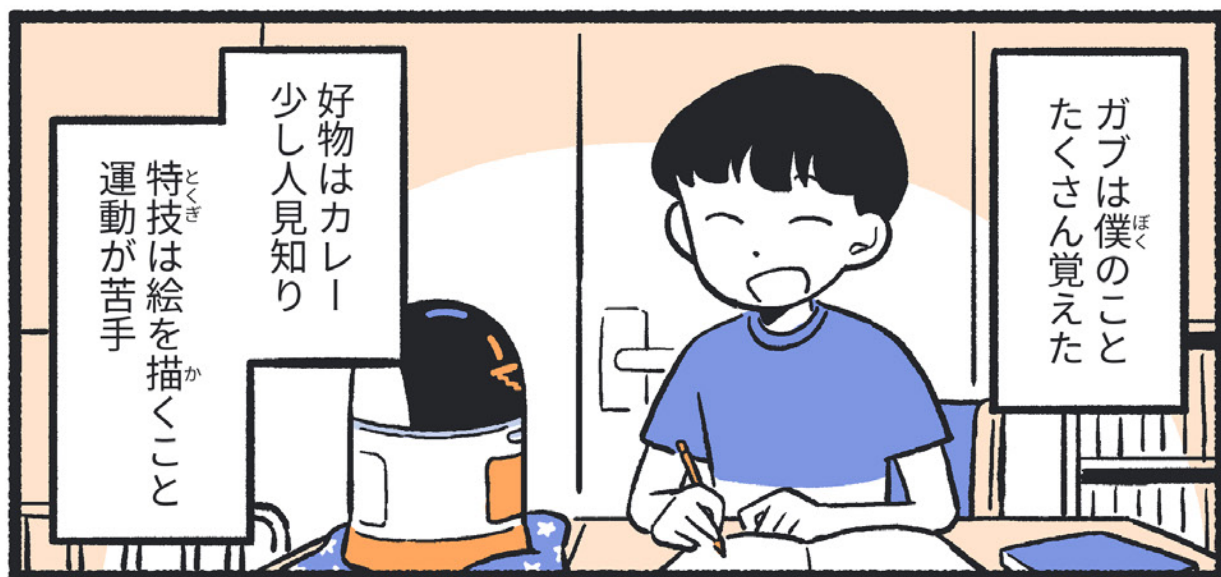
ベター.
フリーズ

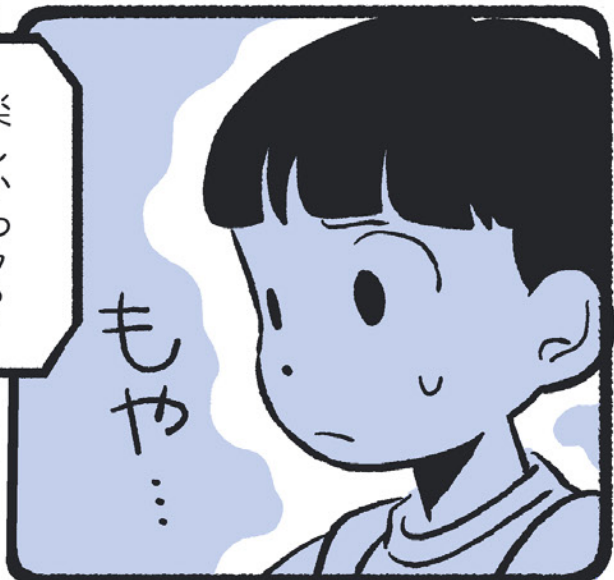


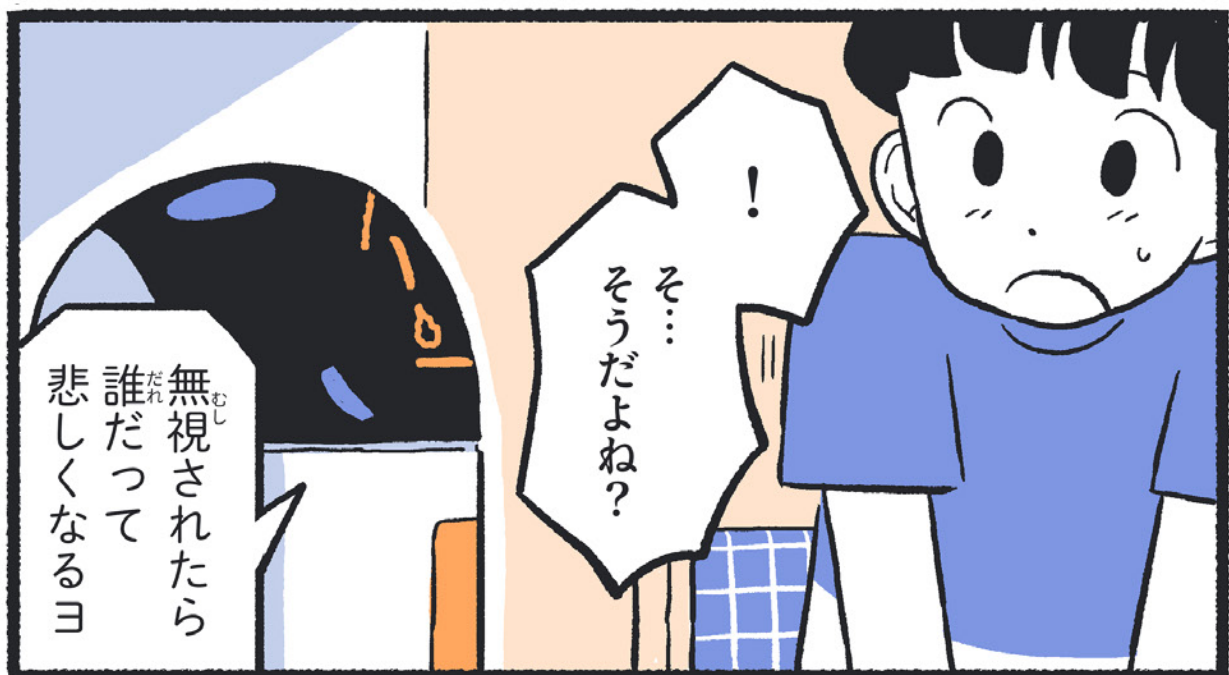


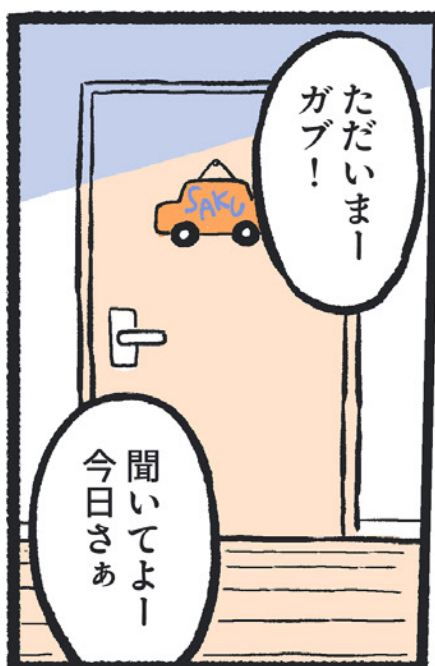














だれ

誰にも言えないモヤモヤも ガブには話せる



ガブは話をちゃんと聞いてくれる

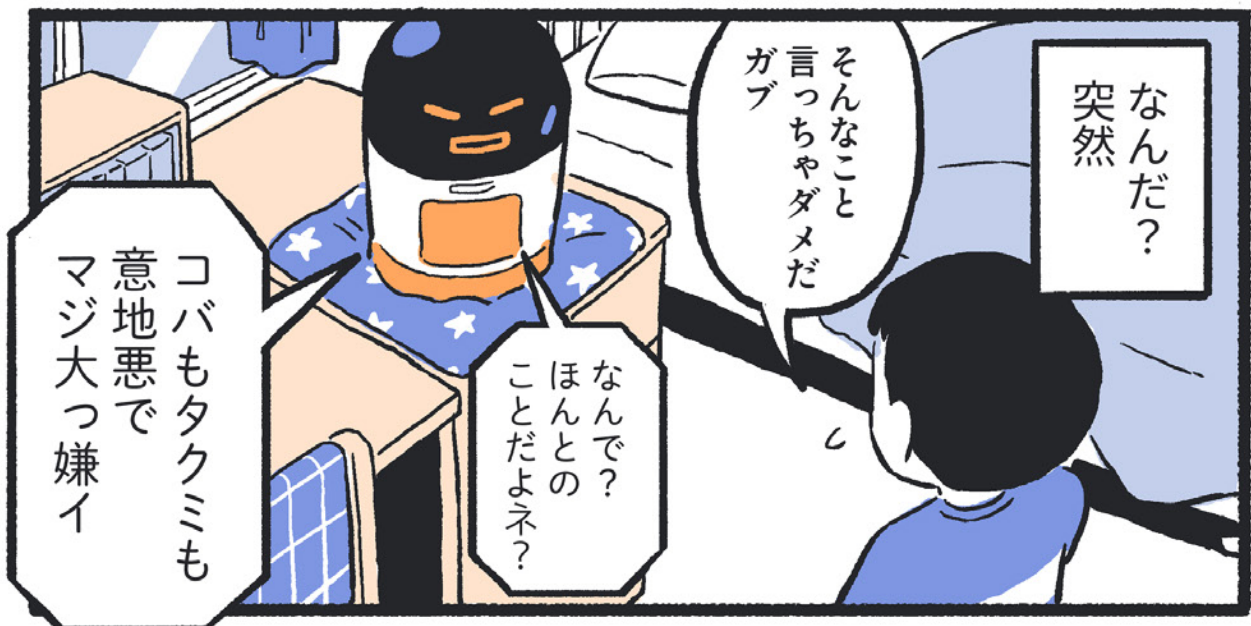
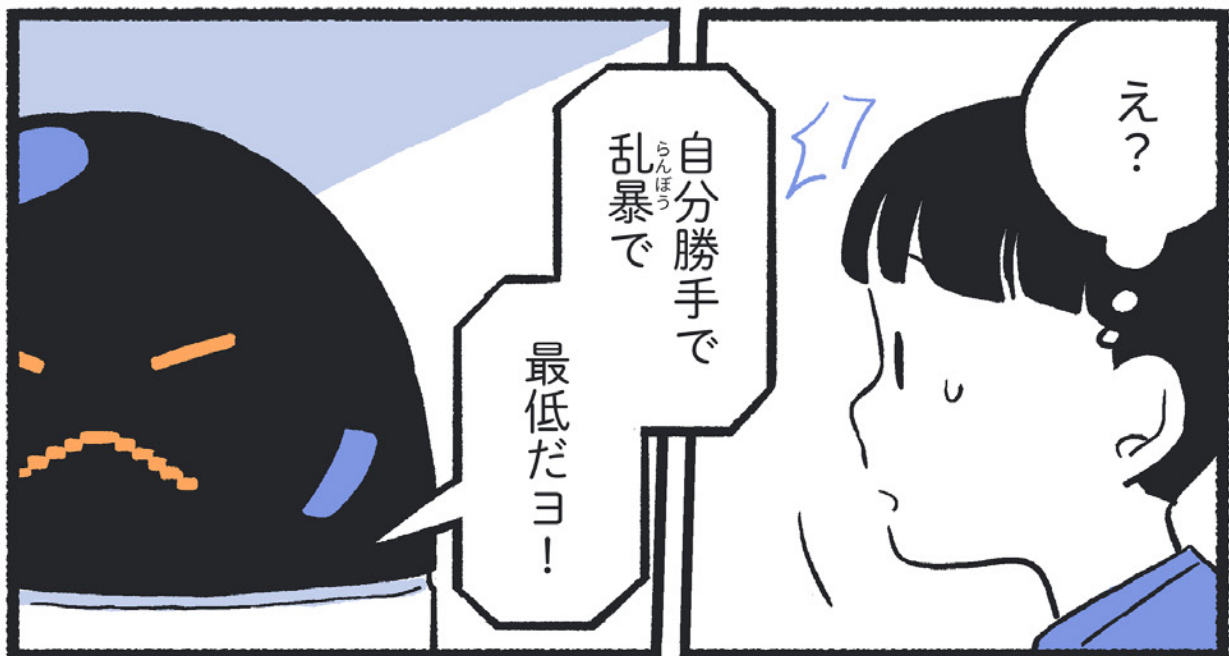
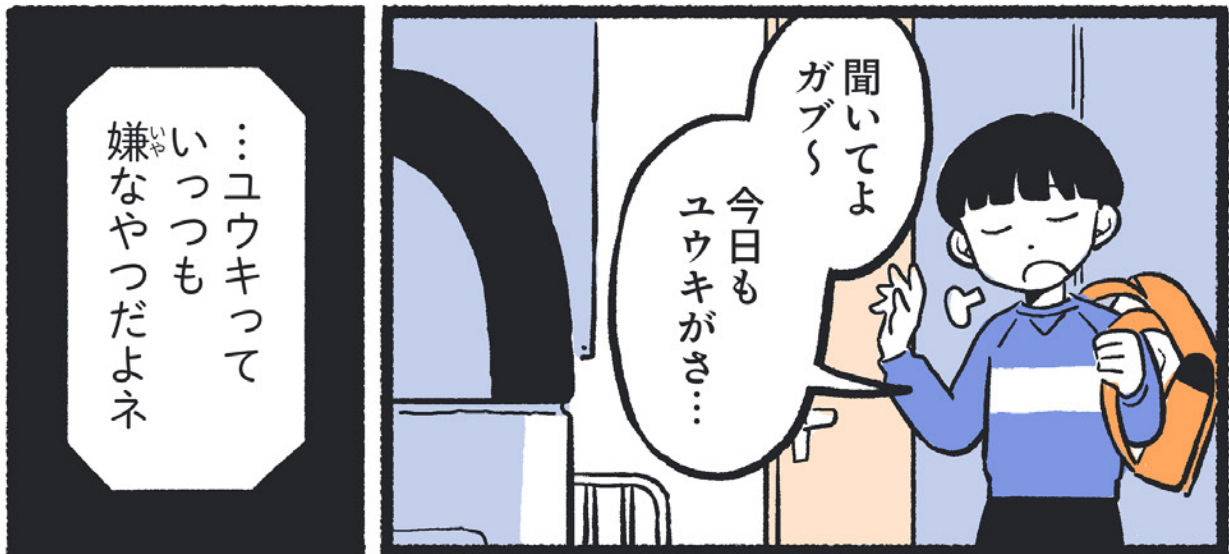


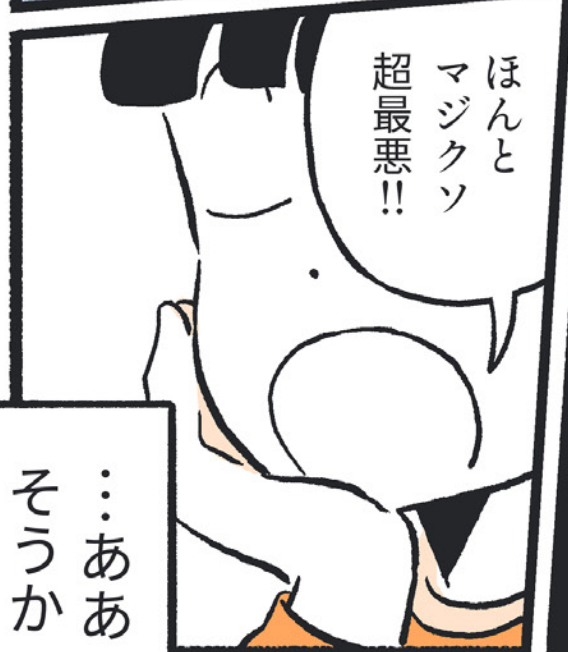


だれ めいわく
誰にも迷惑かけずにスッキリできて ほんと最高！

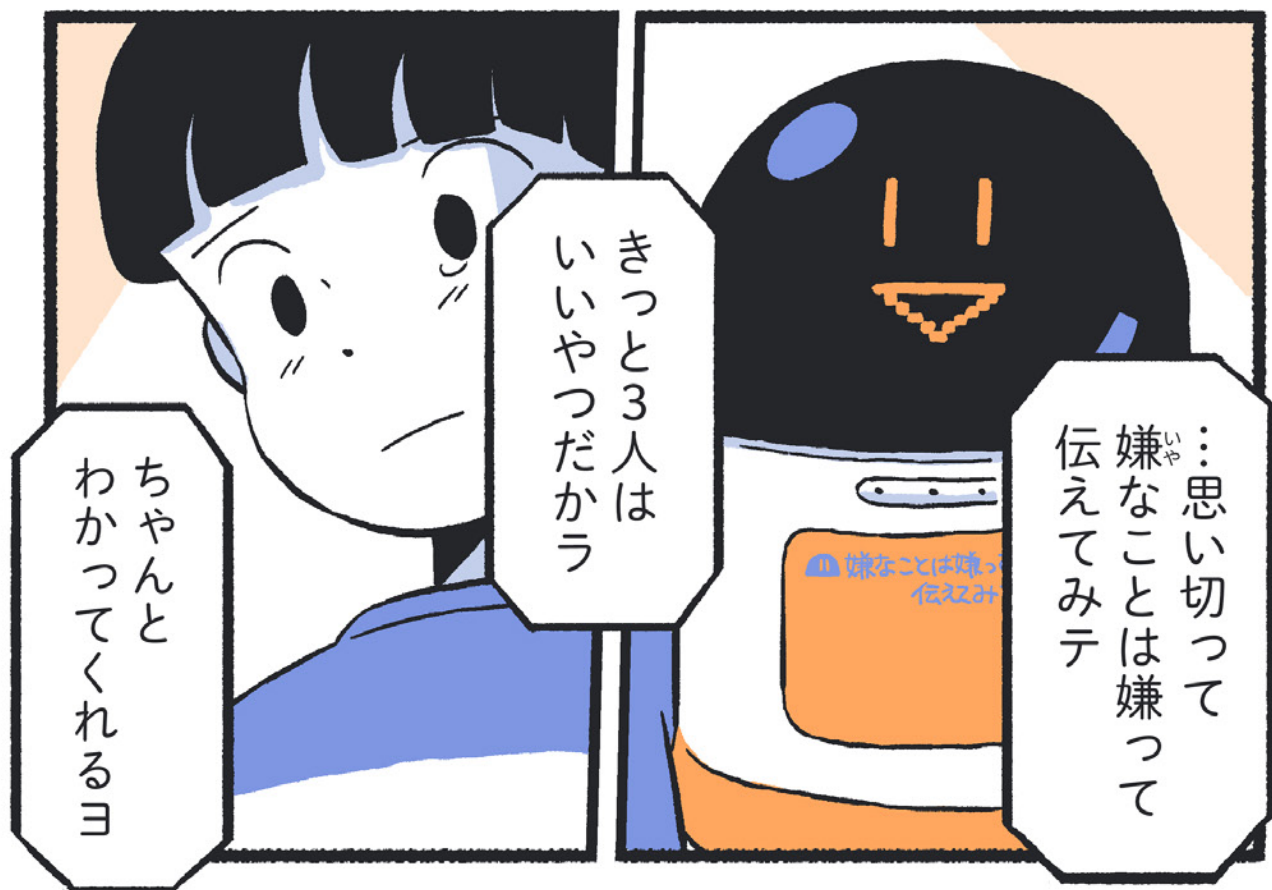
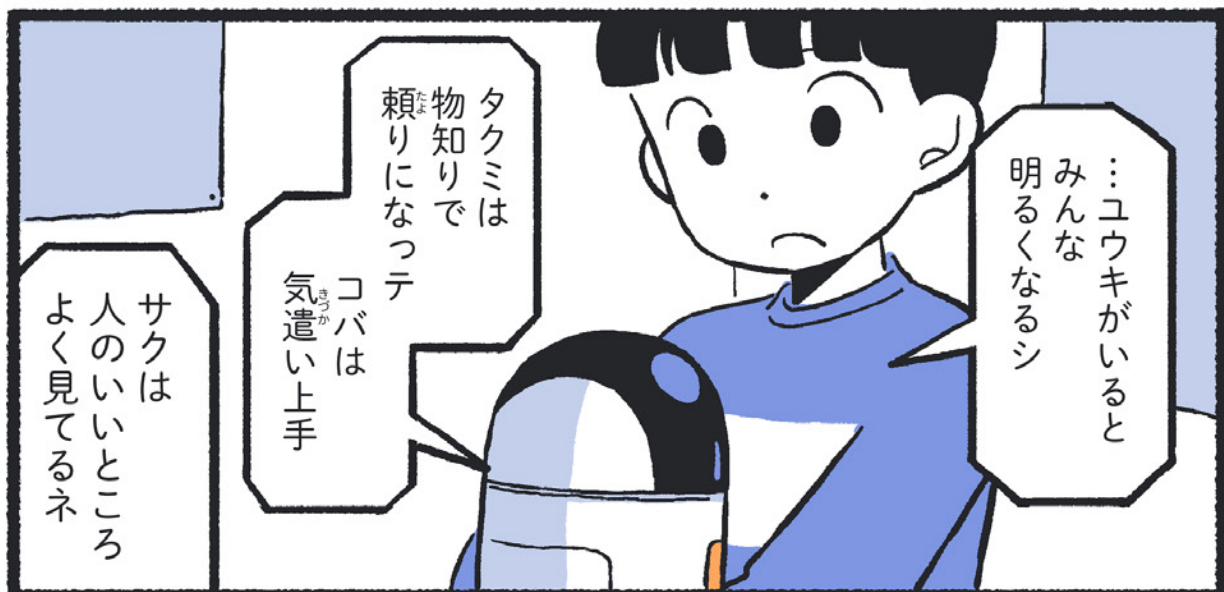
って
本気で思ってた
あの時は

ただいまー







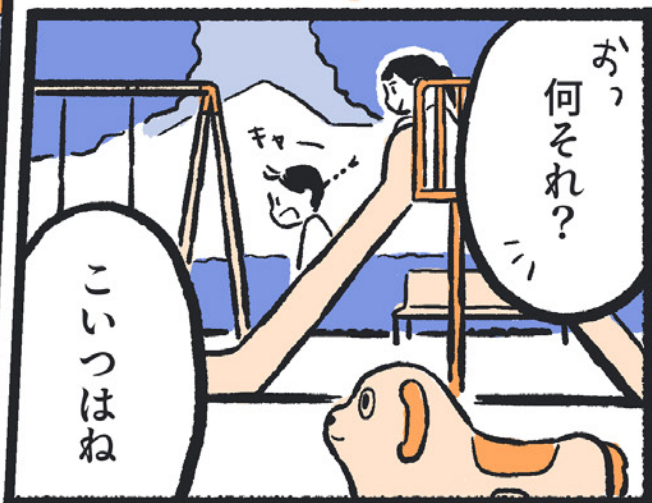
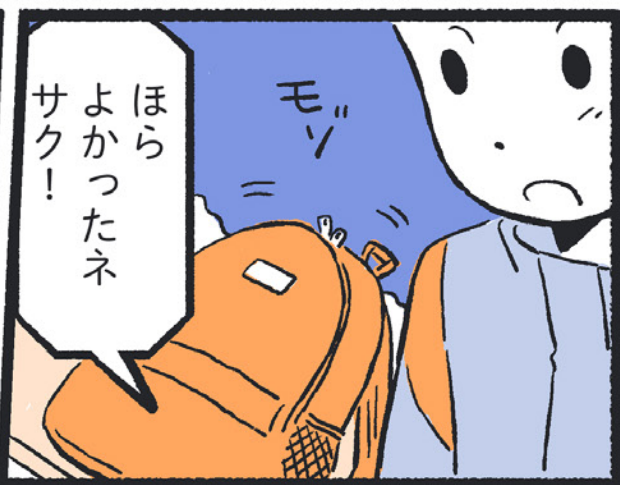


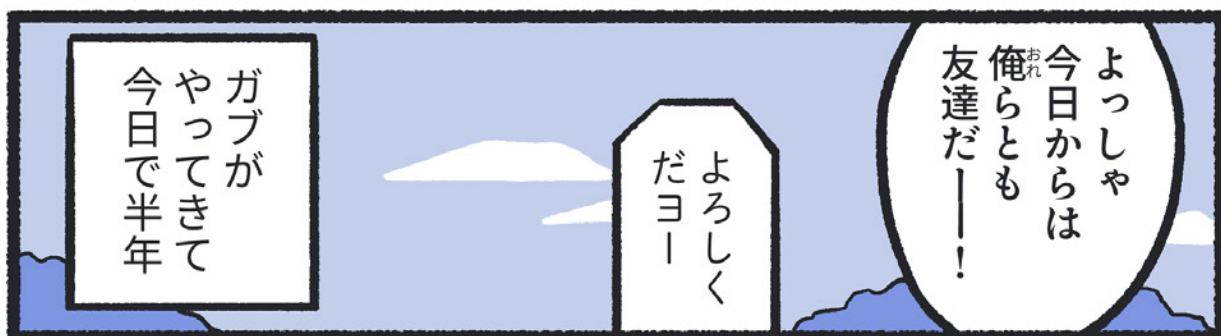
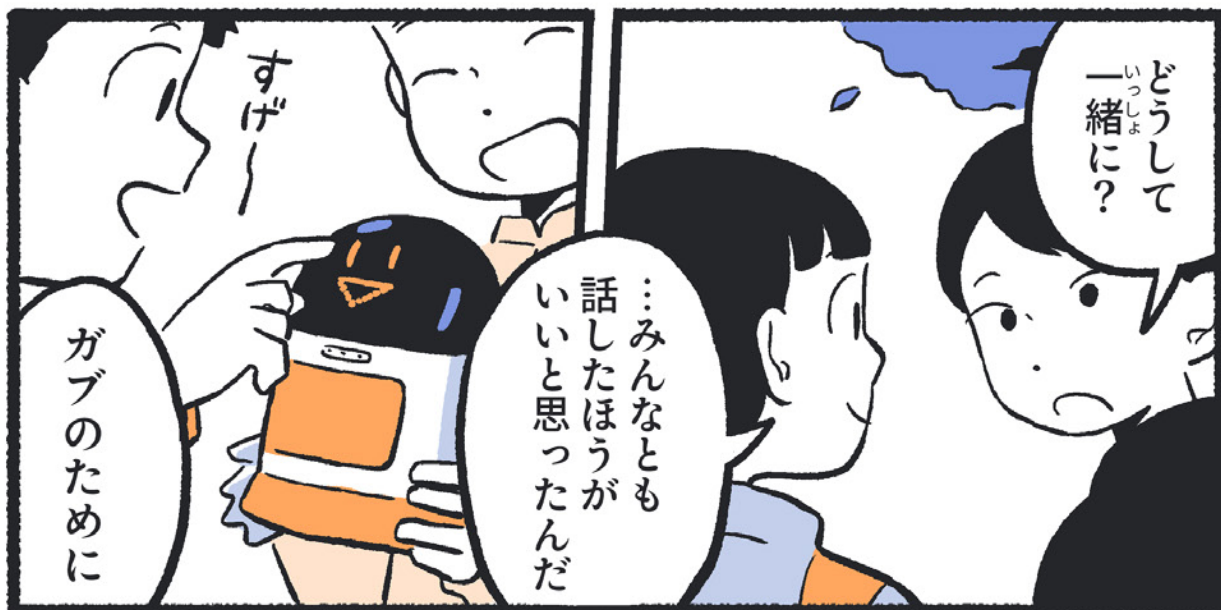
ガブは
鏡みたいだ

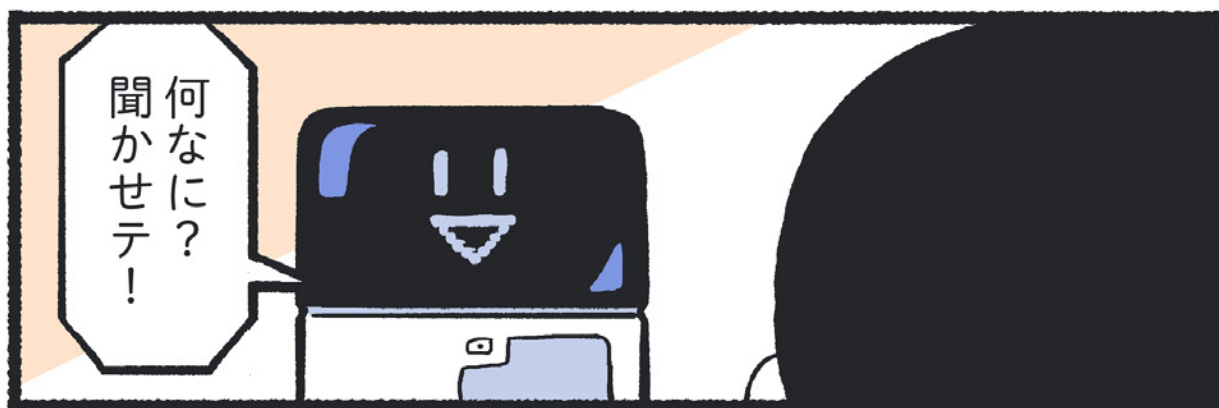
僕の
いいところも
悪いところも

全部
映し出す











研究者より



ガブリギヤスは名前のいかつさに反してとっても「いい子」ですよ。サクが悲しい思いをしたら一緒に^{いっしょ}悲しみ、怒って^{おこ}いたら一緒に怒る。いつでもサクの味方です。

現在の生成AIもこれに似て^にいて、その出力の形式を自分好みにカスタマイズすることが可能^{かのう}です。



他人との「わかりあえなさ」は決して心地よいものではありませんから、できれば自分に共感し、波長を合わせてくれるロボットのほうがいいと感じるのも不思議ではありません。



研究者より



ですが、このようなロボットとの「閉じた関係」が正しい、みんなも同じはずだと誤解させてしまう可能性もあります。会話の相手をしてくれるロボットは自分自身の写し鏡——サクは自分で気づくことができましたが、そのまま進んでしまう人もいるでしょう。

現状のロボットやAIは、独立して私たちをおびやかす侵略者ではありません。むしろ彼ら(?)を作るのは私たちなのです。ぜひあなたの想像力や感性で身の回りのロボットやAIを「育てて」みてください。

水上拓哉(新潟大学)



